

文明災と仏教

一 郷 正道

はじめに

「文明災」とは、3・11の東日本大震災に対して哲学者、梅原猛氏が名づけた表現である。地震、津波に福島原発事故が重なったこの大震災は、天災・人災が複合して大被害をもたらしたまさに「文明災」といえよう。そして、氏は、優しさと恐ろしさの二面性をもつ自然への崇拜を失ない現代文明に依存しきつてきたわれわれの生活を反省し、自然を畏敬する文明をとりもどすことを喚起しておられる。

われわれに絶大な恩恵を与え続けてくれた、いわゆる近・現代文明が、西欧の科学

技術の進歩と人間中心主義（ヒューマニズム）から成っていることは論を俟たないであろう。この文明への全面的依存に基づくわれわれの生活に対する警告、見直しの見解がしばしば吐露されていることは承知しているが、このたびの大震災が一段とそれに拍車をかけているように感ずるのは私一人ではなからう。これに関して仏教がいかなる回答を用意しているのか改めて本稿で確認してみたい。

人間中心主義の自然観

まず、人間の自然とのかかわりについては次のような『旧訳聖書』の文言が出发点としてあることを指摘せざるをえない。

「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ、また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」（創世記1-28）

文明災と仏教

ここには明瞭に人間が、地球をまた人間以外の動植物を支配していいとのメッセージが込められていることを見逃すわけにはいかない。われわれは、近年、「自然を征服する」「自然を開発する」といった日本語表現になんら違和感を覚えなないほどになっているが、これほど自然に対する人間の傲慢さを顕著に表わす表現はないように思えてならない。

ギリシャの哲学者・プロタゴラス(BC490-420頃)の次の有名な文言は、人間中心主義発生の原点かもしれない。

「人間は万物の尺度であり……」

イギリスのルネサンス時代の政治家・ベーコン(一五六一—一六二六)のつぎの文言には「創世記」にあった言葉がそのままみられる。

「人間は自然に服従しながら自然を支配する」

また、フランスの科学者、宗教思想家・パスカル（一六二三—一六六二）のつぎの有名な文言には人間の知性の優位性をはつきり述べられている。

「人間はひとくきの葦あしにすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。……だが、たとい宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙は何も知らない。」
（『パンセ』三三七）

それに対し、次の詩歌に見られるような、われわれに自然（動・植物）との一体感、自然（動・植物）への感謝の念を呼び覚ます感情を失なってはならないと思う。

「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」千代女

「命をば命となせしわがいのち　ご恩報じ永遠にいきなん」横山いそまつ

文明災と仏教

仏教には「生きとし生けるもの」を意味する言葉に「有情」「衆生」があるが、そこには人間のみなならず一切の生き物が含意されていることを忘れてはならないと思う。朝顔のいのちも魚のいのちも人間のいのちも、生かされている点では全く同じ価値をもった存在なのである。

人間中心主義は欲望充足を目的としがち

西欧の科学技術の進歩がもたらした最悪の成果は原水爆の発明であろう。いまやその使用が地球の、人類の破滅につながることはだれしもが認めるところであり、その認識がその使用の抑止力となっている。しかし、いつ、どこに狂人が誕生するかはこれまた誰も予見できないことである。爆弾使用の危険性は十分に認知するとはいえ、国家の平和、国家の威信、権力の維持のためにいまにいたるも核保有をめざす動きは止むことがないのが実情である。その「平和利用」という美名のもと、人間の快楽、豊かさの追求も留まるところがない。このたびの「文明災」が、「平和」の仮

面の虚偽性を一瞬のうちに剥いでしまった。が、現代人の欲望が抑制されない限り「平和利用」「より安楽な生活」を口実にしての原発依存は続くであろう。国家と個人の安寧のためといいながら、その根底にわれわれの欲望があることをしっかりと認識しておくべきであろう。身の回りの諸事象で改めてそれを見ておくことにする。

より安楽な生活を求めれば、電気への依存度は増すばかりである。発電の方法として①自然力（水力、風力、太陽熱等）、②石油・石炭、③原子力という3つが現在のところ機能している。しかし、いずれも欠陥がある。①では需要の絶対量を満たせないし、②では二酸化炭素による地球温暖化、酸性雨、樹木の枯れ死、洪水の危険、呼吸器疾患をひきおこすし、そして、③では放射能による惨禍が現実となってしまう。

われわれには、体力の消耗は求めず短時間で遠距離を走り未知の世界に触れたい、楽をしたい、という欲求がある。この欲求が、航空機、自動車、高速鉄道の発達を促した。しかしそれが、CO₂発生による空気汚染、騒音被害、一旦事故をおこせば多数の死傷者を瞬時に発生させる、といった困った状況を呈することになった。

文明災と仏教

われわれには、清潔で軽くて丈夫な食器を使いたい、という欲求がある。この欲求が、プラスチック製品の普及を促進させた。しかし、それが、廃棄処分にあたって有毒ガスの発生をもたらすことになった。

われわれには、新鮮で色鮮やかな野菜、くだものを常時食べていたい、という欲求がある。この欲求が、農薬の進歩を促進させた。しかし、それが、身体故障、季節感の喪失、旬の味を知らないことになる、といった弊害をひきおこした。

われわれには、丈夫で長生きしたい、という欲求がある。この欲求が脳死、臓器移植の法制化をもたらした。これについては多くの識者による議論が繰り返された結果であり、小生がごときものが今さら口をはさむべきことではないであろうが、あえて私的所感をのべることにする。

私は、本来、ご縁によって死すべきいのちをいただいている事実を受け入れるべきであり、他人の臓器をいただいているいは買ってまでして延命を図りたいとは思わない。

このたびの法制化によって、いのちが、ますますモノ扱いされそうになることに強

い憂慮をいだくのである。そこに垣間見えてくるのは、部品交換の論理であり、金銭による臓器の売買の事実であり、長寿も金次第という風潮の発生である。本人の意思は本心に尊重されるのか、移植の公平性、平等性はどこまで維持されるのか、という疑問がどうしても付き纏う。

これらほんのわずかな諸事象に思いを馳せただけでも根底にわれわれのどす黒い欲望がうずまいていることに気づかざるを得ない。

それでは、欲望を根底におく自己中心的、人間中心的世界観を打破するために、仏教にはどんな教えが用意されているのであろうか。

人間中心的世界観に替わる仏教の教え

(1) 苦悩の原因は欲望(渴愛)と無知(無明)にあり、との教え。

釈尊は、人間の根本的苦悩(生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦とい

文明災と仏教

う具体的な七苦、総じて語る五蘊盛苦をいれての四苦八苦)の原因は、欲望と無知にある、と四聖諦、十二支縁起の教えで見抜いておられた。因みに、四苦八苦は想定外の文明災が発生しなくても、経済状況が良好なときでも、私をいじめる存在がないときでも、私が生きている限りつねに私に付きまとう苦である。

文明災という表現に象徴されるようなこのたびの大震災の原因を自然の猛威だけに帰することはできない。「自然を征服する」といった傲慢な言辞を弄し、本来的な自然との共生を顧みることなく、幸せ、欲望追及に走ってきた現代人は、このたびの自然の猛威の前に言葉を失い、平伏すしかなかった。

原水爆による核戦略、核武装は、人類、自然破壊をもたらし、以ての外であるが、原子力の平和利用、とりわけ原子力発電は、安全であり、国家、国民の平和安寧に欠かすことができない、と喧伝されてきた。かかる言論を信じこまされ鵜呑みにしてきたのであるから、私たちの無知にもその責任があることを認識すべきだし、電力会社や政府やマスコミを今になって批判するだけでは根本的解決には至らない。

(2) 「少欲知足(欲するを少なくして足るを知る)」という教え。『大無量寿経』

『真宗聖典』二七頁)

とくに現今の日本人は、世界の国々と較べてどれほど裕福な生活をしているか再認識すべきであろう。欲望にはきりが無いわけであるから、現状で足りていることを知り、足りていることに感謝する気持ちを持ちたいものである。

(3) 業報輪廻の教え。

人は、その人の行為(業)の結果として六つの境涯(道)(地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、神々)を輪廻するという。そこには悪因苦果、善因楽果という因果応報の理があり、自業自得が必然である。

人間界も六道という迷界の一つであってみれば、他の五道と同類であって勝るものでも劣るものでもない。人間は、他に勝る絶対的存在などではなく有限な存在でしかない。

文明災と仏教

そうであつてみれば、前掲の『旧約聖書』に見られた如き、人間が他の種の上に立ち、他の種を従属させてもよいという考えは認められない。従つて、動物を殺戮したり食料としたりすることは許されることではないはずである。しかし、それが、生きるためにやむおえないことであれば、さけられぬ罪悪深重のわが身に痛みを感じ、感謝の念で食べ、無駄に生命を奪つたり捨てたりしてはならない、という生活規範が生まれるであろう。前掲の横山いそまつさんの歌を想起すべきである。

かかる業報輪廻説が釈尊の教説から親鸞聖人にまで連綿と継承されてきたことを語る文言を挙げておこう。

あらゆる有情は輪廻の中においてたがいに親族であつた。(相應部經典Ⅱ一八九の取意)

六道の衆生は皆我が父母なり(梵網經)

一切の有情は無始よりこのかた生死を遍歴し長時にわたり流転するとき、互いに父、母、兄弟、姉妹、師、高貴で権勢の人に、ならないことはない。かかる因

縁によって、一切の敵はみなわが友人でないことはない。(アサンガ・無着三一〇—三九〇頃『瑜伽師地論』聲聞地より)

無始以来の輪廻において何百回と輪廻転生するうちには、自分の血縁にならなかった有情は誰もいない。(カマラシーラ・蓮華戒七四〇—七九四頃『修習次第』より)

一切の有情はみなもって世々生々の父母兄弟なり。(親鸞聖人のお言葉、『歎異抄』第五条より)

仏教では、「生きとし生けるもの」のことを「有情」「衆生」という。いのちあるものはみな同じ価値をもった存在であると理解しているから「生きとし生けるもの」は、人間だけでなく動物のいのちも植物のいのちも含まれることに注意すべきであろう。

生物学、遺伝子の世界では、ヒトの先祖はチンパンジーが一番近く、その次がゴリラであると証明されている。その進化の流れを知らされればわれわれヒトの優位性は絶対的なものではない。

文明災と仏教

また、イスラム教とキリスト教との悲惨な宗教戦争に目をむけるならば、源をたどればユダヤ教であるわけで「一切の敵はみなわが友人でないことはない」とのアサンの言葉が心に響いてくる。

(4) 五蘊説

仏教の人間観は、1. 物質(色)、2. 感受(受)、3. 知覚(想)、4. 意欲(行) 5. 識別作用(識)という五種の要素(五蘊)、詮ずる所肉体と心との仮の集合が、ヒトの個体であるとする。動物の個体も五蘊の仮の集合であるから異なるところがない。

そして、五蘊仮和合説なる人間観は、自我といった精神的実体の存在を否定するものである(無我説)。自我なるものを見出さず、かかる精神的実体を否定するならば、そこには人間の自然に対する優位性など認められないといえよう。

以上、略記した仏教の教えによれば、人間中心の世界観は否定され、有情としての

個々のいのちの重さ、平等性が教えられ、本来的に自然との共生が志向されていたと思わざるをえない。

聖教の確かさ

文明災を通じてお聖教の聖句の確かさをあらためて教えられ、頭を垂れるばかりである。

(1) 『歎異抄』後序に、親鸞聖人のお言葉として「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり」という文言が紹介されている。

あの親鸞聖人が善悪のふたつの判断にお困りになるとは、よほど深い意味があるのであると思案していた。

玄界灘原発の再稼働を巡って九州電力が聴聞会を開き、その折、多数決で民意を問うた。その結果は、再稼働を認める意見が多数をしめた。しかし、それは、九州電力

文明災と仏教

が再稼働賛成派を送り込んでの「やらせ」の結果であったことが判明した。民主主義においては多数決の結果は重い。多数は善であり少数は悪として処理されがちである。しかし、それが、「やらせ」の結果であったとすれば、正に、善悪の判断は無効である。民主主義の制度に基づく判断そのものの善悪が問われることにもなる。

菅首相は、福島原発事故を踏まえて引退直前に「脱原発」を表明し、世論は大方向、勇敢なる方針転換だとして、それを「善」なる決断であると好意的に賛意を示したようであった。しかし、それは、総理の地位の延命策にすぎないと評価されはじめると「善行」とは言えなくなってしまう。ひとつの決断が、オモテとウラ、善と悪の様相を持ち、不透明な決断となってしまう。

(2) 震災復興にあたって、国内のみならず世界中から寄せられる善意、善行は、誠に尊く、これに勝る励みはないといえる。私たちも、それぞれの場で微力ではあっても協力を惜しんではならない。

しかし、ここでもまた、親鸞聖人のお言葉に直面し、自己の有限性、エゴイズムの

醜さを知らされ、頭を垂らすしかない。すなわち、『歎異抄』第四条の次のような文
言に遭遇する。理解を容易にするため、文章の順序を変えてその内容をしめせば次の
如くなる。

慈悲に聖道、浄土のかわりめあり。

聖道の慈悲というは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、
おもうがごとくたすけとぐるること、きわめてありがたし。

今生に、いかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたけれ
ば、この慈悲始終なし。

浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもっておもう
がごとく衆生を利益するをいふべきなり。

しかれば、念仏もうすのみぞ、すえとおりたる大慈悲心にてそうろうべきと
云々。

文明災と仏教

私の抱いている慈悲心は、所詮、聖道の慈悲でしかない、と嘆息せざるを得ない。そうであれば、それは、「きわめてありがたき」ことであり、「徹底できないもの」であると認めざるをえない。

『歎異抄』にみられるこの聖人のお言葉が、聖人自身の厳しい深い自己への省察から発せられていることは、次の「和讃」からしてもまちがいないであろう。

小慈小悲もなき身にて

有情利益はおもうまじ

如来の願船いまさずは

苦海をいかでかわたるべき（『真宗聖典』五〇九頁）

このような内省は、他者支援、慈善事業に熱心に関与すればするほど痛いほど実感せざるを得ないであろう。

現実の問題として、私たちは、死の病床にいる人のその苦を、できるものなら代わ

ってやりたいと思ってもどうすることもできない。家も財産もいらなからこの人のいのちをたすけてほしいといわれて、いくら最先端の医療をもつてしても助けてあげることができない。

戦地へ子供を送った人、親を早く亡くした人、子供に先立たれた人、正に想定外の自然災害にあった人、交通事故にあった人、等々のいのち、「いかに、いとおし不便とおもうとも」どうすることもできないのである。

あるいはまた、病気の看護を続けながら、それが長期化すれば、本人もつらからうし私もつらい、いつそのこと早く死なれた方が片付いていい、と思いかねないのが私という人間である。かわいそうもいとしいもあつたものではない。自分がいとしいだけである。

そんな自力の限界、エゴイズムの醜さを厳しく指摘される聖人のお言葉に頭を垂らさざるを得ない。聖道の慈悲の虚しさから、それを諦め放棄してもいいということではないであろう。自力の限界を知りながらも、苦悩中の人々に、心を寄せ、私も苦悩を背負うことは忘れてはならないであろう。

文明災と仏教

それでは、どうしたらいいのか。親鸞聖人は、「まず、すみやかに仏・覚者になりなさい」と私たちの生きる道をも教えていくくださる。

覚者となり仏の智慧を獲得したならば、不可能なことは不可能なことだと見定めがつくし、自・他の区別をしようとする差別心が否定され、平等に対処することが可能になる。そして初めて利他ということが可能になる。利他行は、仏・覚者でなければできないのである。

仏・覚者に遭って仏・覚者の精神に触れる。そこで、自力、エゴイズムが否定され、それによって、他者への目が開かれる。その目こそが、浄土の慈悲といわれるものであろう。

目に見えない、意思、意識、分別を超えた、無限にして無量なはたらき（アミダなもの）が、この私を形成し、この私一人を生かしてくださる。そういうはたらきだけが、平等に、他者である生きとし生けるものの助けとなりうるのであろう。

これまで、私は、つい「〜してやる」と表現し行動してきたようである。これに替えて「〜させていただきましょう」と自然に表現できたら、いくらか仏・覚者の精神

に触れることができるかな、と思う昨今である。

参考書

御牧克己編 『梶山雄一著作集 第八卷 仏教と輪廻 仏教と現代の接点』 春秋社 二〇一

一年

平野修選集刊行会 『平野修選集 第十四卷』 文栄堂書店 平成十一年